

# 保護時 対応適切に

## 認知症高齢者の徘徊

認知症を患った高齢者が徘徊して行方不明になる事案が増加傾向にある中、捜索に携わる人たちの発見・保護時の対応にも配慮が求められている。12日には、向日市上植野町の向日町署で、署員約60人が「認知症サポーター養成講座」を受講し、相手を尊重する接し方を学んだ。

名前や住所が分からず、傷つけてしまう。続かない、書けないと話す。認知症の男性に、警察た寸劇では、警察官が官はいらいらした態度で「名前くらいは幼稚園児でも書ける」と言いつつ、話しかけた。署員が寸劇で「悪い対応」を披露した。警察官は早く身元を調べようと思死だが、対応を間違えば認知症の人の関わり方は大切と

注意を呼びかけた。認知症が原因で行方不明になったとの届け出は、同署管内で2013年は19件、12年は21件あった。しかし、路上などで保護した高齢者らが認知症やその疑いがあったケースは13年で125件、12年は116件と届け出も大幅に多い。

### 向日町署員ら学ぶ 地域力も不可欠

保護の際、トラブルになるケースも想定され、同署は「発見するだけでなく、患者や家族の不安を解消したい」と企画した。松村副部長は署員に「多くのことを一度に



認知症の人を発見、保護する際の対応を説明するため、寸劇をする向日町署員(向日市上植野町・向日町署)

認知症への対応が地域社会の懸案となる中、乙訓地域でも福祉や医療などの枠を超え、向日市では、外出し取り組みが進む。地帯包括支援センターが中心となり、徘徊した商店、警察などが情報

築している。2011年から実施する模擬訓練では、地域住民や商店、民生児童委員らが参加し、徘徊者役に声をかける実践しながらの取り組みを続ける。

市中地域包括支援センターの石松友樹センター長は、認知症への偏見をなくすことが第一歩だと指摘する。「住民同士が率直に話し合える環境をつくりたい。地域みんなで見守り」と声かけができるようになれば、徘徊ではなく散歩になり、家族は安心して暮らすことができる」と話す。(峰政博)

